『石像が空を飛んだ日』を読んで

天草二

別冊シャレード８１号『村瀬継弥　特集２』特別書き下ろし作品　村瀬継弥『石像が空を飛んだ日』を読みました。村瀬の作品は、短編の藤田先生シリーズを読んだことがあります。小学生に関係する話にもかかわらず、とても不思議でドキドキするような作品でした。手に汗握ることもあれば、あまりの不思議さに思わず頭をひねるものまで、ヴァリエーション豊かです。学園物ですが、ラストは思わず唸ります。がっかりさせません。

さて、『石像が空を飛んだ日』は、藤田先生物ではありません。学園物ですが、学校の事務職を主人公にした作品は始めてみます。まったく新しい視点ではないかと思います。リストラされたエリートサラリーマンが、私立高校の事務職に仮就職します。切羽詰っているとはいえ、そのような職場に勤めようとするのは、ものすごい決断です。その主人公の視点で、学校生活が描かれます。学校の事務関係の仕事が結構詳しく描かれています。学外の人には、新鮮な感じをもたれるのではないかと思います。しかも,その語り口が、とてもソフトで親しみがあり、殺人事件が起こっているにもかかわらず、陰惨でなく、逆に主人公の逆境にこちらが思わず頑張れと、声援を送りたくなります。事務関係から見た、教員のあり方も面白いです。それぞれの頑張りが学習指導だけでなく、行時面での指導は意外と知られていないのではないかと思うのですが、きちんと描かれています。巷の不況を、小市民的な肯定的な感覚で何とか乗り越えようとしています。その作者の企ては、まさに成功していると思います。ほのぼのとした読後が読者を捉え、また少しほっとします。そういえば、最近の京極夏彦『探偵小説　百器徒然袋　風』薔薇十字探偵の活躍を描いていますが、その予定調和の結末は、ある種の安定を私たちにもたらします。あまりに独特しすぎて、他の追随を許さないのですが、大きく捉えるとその線に落ち着きそうです。その感じを読者は期待していそうです。これも裏切りません。どこから読み始めても、京極ワールドです。実に安心して読めます。

冒頭からとびっきりの謎が提出されます。読者は、その光景を夢想し、悩まされます。石像が飛んで、被害者を殴り殺す。とても、現実的とは思えません。いろいろな推理が錯綜しますが、作者の視点は、事件をめぐる学校の動きと主人公の人生模様に集まっているようです。事件解決の一瞬は、少し唐突過ぎてわかりませんが、事件の証言をめぐる作者の企てには、いっぱい食わされてしまいました。どうも、文中の登場人物の発言をそのまま真実と思い込んでしまう、書かれているものが正しいと思ってしまう、そのように思っているようで、後でそれが偽証とわかってびっくりです。確かに、犯人は自分の都合のいいように発言するのは当然です。どうもうまく騙されてしまいました。いつも騙されるのですけれど。推理小説読みとしては、失格かもしれませんが。殺人の動機に関しては、いろいろ意見があるようです。このような理由で、殺人を犯そうとするのか。今の日本を取り巻く状況を考えると何でもありのようにも思えます。このような傾向がこれからも続いていくのか。短絡的で、何気ない一言にカチンときて殺人を犯す。でも、だからこそ、推理小説の中だけでも、どうしても切羽詰って、いかんともしがたい状況が後ではっきりわかるような状況を作り上げてほしいなあと思うのですが、如何でしょうか？この作者の雰囲気とそのような犯罪の動機の整合性は難しいのでしょうか。様々な動機の伏線が、この作には散りばめられているようです。如何でしょうか。

最後に、教員養成セミナーの連載はどこかでまとまらないのでしょうか？